



Alcoholics
Anonymous

こちらAA

専門家の皆様へのニューズレター

2004年
No. 14
AA日本常任理事会
広報委員会

〒100-8691東京都中央郵便局 私書箱916

発行所 J S O AA日本ゼネラルサービスオフィス 〒171-0014東京都豊島区池袋4-17-10土屋ビル4F

TEL(03)3590-5377 FAX(03)3590-5419

無力という力」を育む

～アルコール問題を対象とした援助活動をとおして学んだこと～

長谷川俊雄（はせがわ・としお / 愛知県立大学教員・ソーシャルワーカー）

横浜の隣保施設（寿生活館）・福祉事務所・保健所・精神科診療所のソーシャルワーカーとして仕事をするなかで、今振り返ってみるとアルコール問題は常に「手のかかる」「難しい」問題であった。ある時期までは連戦連敗の状態であった。思わず「アル中なんて大嫌いだ！」と言ったことは何回あっただろうか…。

アルコール問題の特徴は、本人となかなか出会えないことや、出会えたとしても「否認」の強さに歯がたたなかったことである。本人が登場するばあいは比較的取り組みやすいが、本人が登場しない家族相談は、そこに本人がいないために難しさをいつも伴っていた。それは、私の目の前に本人がいないという物理的条件だけではなく、すでに本人をある一定の理解や位置づけをしている家族を対象としていることから生じてくる難しさでもある。つまり二重の「否認」が張り巡らされていて、そのなかで飲酒行動が維持・強化されている。そして「手を焼く」相談援助活動のなかで、援助職のぼくも強固な「否認」に巻き込まれ疲弊していくこともあった。その結果「ぼくの良かれと思った働きかけは、本人・家族の迷惑」という予期しない関係性を作り上げていたことに気づいて愕然としたことがあった。

とくにアルコール問題は、多くのばあい本人が最初から登場することはなく、家族や地域・職場の関係者の相談や苦情から始まるという特徴がある。具体的には「何とか救い出してあげたい」「(夫のためなら)何でもします」「早く入院させてほしい」という訴えから相談は始まる。そうした思いは家族や職場・地域の関係者ばかりではなく、誰もが抱く自然な感情とも言えるだろう。しかし、そうした感情は、本人の依頼や確認を得ていないばあい、家族や職場・地域の関係者だけの一人歩きになってしまう危険性をはらむことになる。なぜならば、家族や職場・地域の関係者が考えた末に決断して行なう働きかけが、結果として本人にとって「余計なお世話」になったり、問題に直面している本人を無力化することや危機状況を進行させることに繋がったりもするからである。悪意のない迷い・検討・判断・行動という家族や職場・地域の関係者の一連の善意による働きかけや自然な感情が、結果として、本人を苦しめたり、本人の「否認」を強めたり、

飲酒行動を進展させたりすることに機能してしまう。そうした関係性は、とても「せつない」関係性である。いわゆるコントロール幻想にもとづく「イネープリング」と呼ばれているものであるが、そうした「失敗」経験から学ばないと「せつない」関係性をなくすことができないから、いっそうアルコール問題はややこしく難しい。

家族や職場・地域の関係者、そして援助職は、暗黙の了解となっている“本人が直面している問題は解決しなければならない”という命題を一度疑ってかかった方が良いかもしれない。働きかけたい人、つまり家族や職場・地域の関係者、そして援助職が持つ固有の不安や心配を解消するために本人を利用している可能性が高い。アルコール問題を抱える家族や職場・地域の関係者、そして援助職は、アルコール問題を抱えている本人へいっしょうけんめいかかわりを持つために、本人との「境界線」が混乱しやすい特徴があるためいっそう混乱することは当然のことである。

ではどうしたら良いのだろうか。問題に直面している本人と家族あるいは職場・地域・援助職などの周囲の人たちが、同じ地平に立つ努力と工夫を行ないながら、出会いを生かしつつかかわりつつながりを育み、知恵を出し合い取り組むことが重要になるだろう。しかし“言うは易し、行なうは難し”である。まずは「アルコール問題を解決しなければいけない」「どうにか救い出すべきである」「私が何とかしなければいけない」という感情と考えを一時棚上げすると何が見えてくるのだろうか。その状況に集う人たちが、問題の解決に対して「無力」であることを認めることが大切なこともあるのだろう。有力感や万能感そして義務感や責任感を持つ「私」が、いったんアルコール問題に対して「無力」だと認め、当然だと思っただけで来た「コントロール」を手放したりやめたりすることが要請される。しかし、そのことを一人でやることは、痛みを伴ない、混乱を引き起こすこともあり、とても難しいことでもある。そうした状態を打開してくれるのが「仲間」の存在である。ぼくはアルコールリックではないけれども、ソーシャルワーカーとして仕事に息詰まったときにAAミーティングに参加することがある。ミーティング会場でのフレンドリーで肩の力が抜けた本人たちに何度慰めら

れただろうか、そして力をいただいたらうか。

「仲間」が持つ力のなんと不思議なことか…。

援助活動の経験をとおして、アルコール問題に対して「無力」であると認めることは、その問題の解決へ向けて集う人たちの市民性（普遍性）を認めあうことを可能とし、またそこに集う人たちの固有性（専門性）を認め合うことにつながるようになるかもしれないと感じている。そうすることによって「コントロール」ではなく「サポート」を手に行うことができる可能性があると言えるだろう。根拠もなく今まで否定的に評価され無前提にマイナスの評価を与えられてきた「無力」に焦点をあてて、「無力」を認めることによって、そこには豊かな「無力という力」が生まれることを、ぼく自身のソーシャルワーカーとしての経験にもとづいて話してみたいとたくらんでいる。でも、そんなにうまくいくはずがない。だから、前日にこんな文章を書いているのだろう。

AA「12ステップ」から 第1ステップ

私たちはアルコールに対して無力であり、思い通りに生きていけなくなっていたことを認めた。(AAワールドサービス社の許可のもとに再録)

「本文章は、第16回AA愛知地区オープンスピーカーズミーティングで配布したものです。」

AAの成長を支える AAワールドサービスミーティング(WSM)

経験、強さそして希望を分かち合う男女の共同体であり、アルコール依存症からの回復のために共通する問題を解決し助け合う。「アルコホーリック・アノニマス」の序文にはAAがこう記述されている。AAの昨日の核ともいえるこのプロセスは、世界のいつでもどこでも、ソプラエティを志すAAメンバーが個人同士であれグループミーティングの場であれ出会う機会があれば必然的に起こることだ。1969年以来AAのWSMの努力の甲斐あって、こんな現象が定期的に世界中で起こるようになった。

ニューヨークとその他の外国の都市で二年ごとに開催されるWSMは、世界中から集まるAAオフィスの代表や役員たちが集まって共通する問題やその解決法を話しあう場であり、AAのメッセージを必要としているあらゆる場所に届ける役目を果たしている。

はじめに

そもそものきっかけはAAの創始者の一人であるビル・Wが7カ国にまたがってAAミーティングを訪ねあるいたヨーロッパ旅行であった。そこで彼はAAがアメリカ、カナダで始まって間もないころ抱えていたのと同じ問題に悩まされているのを見たのだった。母国語によるビッグブックの欠如、成長を阻むAAの内外的な障害、そしてあらゆる苦難がそこにあった。それまではAAのニューヨーク事務所だけが他の国でのAA発足の指導をしていた。もしも、国境を越えた

AAグループの代表者たちが集まって学びあう場があったなら、アメリカとカナダのサービスオフィスはもっとシンプルに世界中のグループの先輩の一つとして存在することになるだろう、とビルは気付いた。

「まずはWSMを始めることを提案したい。ただし、これは世界AA(1969年秋に3日間にわたって開催された)とは違った趣旨で“会議”とは別である」ビルはこう書いている。「30年にわたる積み重ねを世界からの代表たちが実際に見ることが出来るという意味で、開催場所としてはニューヨークが良いだろう。AAのメンバー人数が増え、成長に伴う問題が浮き彫りになりかけた国々からの参加者があることを期待する」

3日間の日程の終わりには代表者たちはもっと学び合う余地があると認識し、3年後にまたニューヨークでそしてその3年後には違う国の都市で、交互にWSMを開催していくことを決定した。それ以来WSMはロンドン、ヘルシンキ、サンファン・デ・リオ(メキシコ)、グアテマラシティ、ミュンヘン、カルタゴ、オークランド(ニュージーランド)で開催されている。

1998年10月4-8日ニュージーランドのオークランドで開催された第15回WSMは様々な意味で第一回のミーティングと似ていた。22カ国からの39人の代表者たちが、全ての参加国AAからの報告、AAの主要トピックについての発表、様々なミーティング、国境を越えたコミュニケーションのためのワークショップでぎっしり内容の詰まった4日間を楽しんだ。

恐らくその中でも一番有益だったのはシェアリング(分かち合う)セッションだったろう。その場では代表者たちはどんなことでも発言することができた。きっと彼らは最初それぞれ抱える問題は誰にも話しても無駄だろうという孤独感を味わっていて気がすまなかったのだろう。しかし最初のためらいの後、少しずつ彼らのミーティング運営についての難しい点、ジレンマ、欠点、争点についての本音の発言が出てくるようになった。そして話題にしていることが負の部分であるにもかかわらず、反対にお互いにシェアすることが問題の姿を把握する手段となることに気付くようになった。シェアすることは積みあげられた経験に触れる機会であり、すなわち実行可能な問題解決方法への道となったのだった。

地域ミーティング(Zonal Meeting)が補うこと

AAグループは推定で150カ国に存在し、WSMの代表者たちは、AAのサービス組織がある、国内のAAをまとめる事務所がある、或いは(大多数のケースがこれにあたる)AAの刊行物配布元がある、といった国々から集まっている。

地域ミーティングはWSM開催年の間の年に開かれ、WSMのミーティングが開られない間もWSMの活動を継続させるとともに、まだ組織として機能していない各国の新生AAたちをサポートする役目を担っている。これはフィンランドでの第5回WSMで提案されたもので、「国境を越えたコミュニケーション」分科会の場で、よりよい意思疎通のためのヨーロッパ・インフォメーション・オフィスの設立について議論していた時だった。代表者たちはWSMに参加したことのない国もヨーロッパのAAともっと関わりあっていくことが出来ればよいのに、という思いを持っていた。

アメリカ大陸ミーティング(The Meeting of the Americas、

当初 TheIbero-American Service Meeting と呼ばれていた、注：地域としては北米ではなくラテンアメリカを指す）はそんな中、先頭を切って地域別ミーティングとして発足した。フィンランドWSMに影響を受けたメキシコの代表者が青写真を描き、1979年にはボゴタ（コロンビア）で初めてのミーティングが開かれ10ヶ国からの参加者があり、その中にはWSMにこれまで参加できなかった数カ国の代表も含まれていた。

ついでヨーロッパ・サービス・ミーティング(The European Service Meeting)がヨーロッパ・イン・フォーメーション・オフィスの設立に続いて1981年フランクフルト(ドイツ)で初会合を持ち発足した。マルタとポーランドを含む14カ国から参加があった。1997年の第9回ヨーロッパ・サービス・ミーティングではリトアニアとウクライナの初参加2カ国を含め21カ国からの参加があった。

アジア・オセアニア・サービス・ミーティング(Asia-Oceania Service Meeting)は日本で1995年に初めて開かれ、その成功により1997年3月にはニュージーランドのオークランドで第2回会合が開かれることになった。参加国はニュージーランド、オーストラリア、日本、香港、韓国、タイの6カ国であった。最後に発足したアジア・オセアニア地域ミーティングは、まずその地域に属している国をリストアップしてさらにその中で“隣組(neighborhood)グループ”を編成し、そのグループの中でより確立したサービスを持っている国のAAが同じグループ内の他の国の仲間を助けるという方式を採った。

国際刊行物基金

ここ10年あまりのAAの活動の飛躍的拡大により、世界各地でAAの基本的な刊行物の翻訳や出版が圧倒的に不足するという事態が起こった。ニューヨークAAワールド・サービスは全てのAA認定の刊行物の著作権を有しており、翻訳の正確性のチェック、出版の優先順位の決定、AAの資金的確な運用など膨大な事務を抱えている。1990年の第11回WSMではこの事態に何らかの手当が必要になることが明らかになり、その場で国際刊行物基金を設立しAAワールドサービスが独自の力で翻訳をまかなうことの出来ない国に初歩的な刊行物を提供できるように基金が協力していくことが提案された。1990年以降は、この国際刊行物基金がアルコールクス・アノニマス(ビッグブック)の15カ国語での出版そしてその他の出版物の14カ国語への翻訳にかかる費用負担を手助けしている。

「あなたは独りぼっちではない」というメッセージ

「あなたは独りぼっちではない」これは苦しみに耐えるアルコールクスがAAのミーティングに参加すれば必ず聞く言葉である。メッセージはこんな風に一人の酒飲みから次の酒飲みへと伝えられていく。海外でも初期のアメリカ・カナダで行われていたのと同じように、脆いソプラエティに必死でしがみついていたために一人のアルコールクスから別のアルコールクスへと、このメッセージが受け継がれている。

イギリスでは、ニューヨークのゼネラル・サービス・オフィス(GSO)を訪れていたイギリスのメンバーが3人の一

匹オオカミ的な酒飲みの名前を知り、1947年に合流して旅をしグループを始めた。AAがノルウェーで始まったのは、ノルウェーからコネチカット州のグリニッジに移住しそこでソプラエティを手に入れたメンバーが、弟が故国で同じようにアルコール中毒で苦しんでいることを知ってそのメッセージを伝えるためにノルウェーに飛んで行ったことがきっかけになった。ブラジル、エルサルバドル、アイスランドには旅行中のアメリカ人メンバーによってAAがもたらされた。日本へはアメリカ進駐軍の兵士から、ルーマニアへはアメリカ人の夫婦からそれぞれ伝えられたのだった。

時にはほんの一冊の本が種のようにその土壌で育っていくこともある。南アフリカのAAの創始者は、ある時自分の飲酒問題について助けを求めべく牧師を訪ねた。牧師は自分にはどうしようもないと言いながら、おそらく当時南アフリカで一冊しかなかったビッグブックをその男に手渡した。そんな小さなことから始まって、AAは今もその地で成長し続けている。オーストラリアでは4人の非アルコールクスたちがニューヨーク事務所にビッグブックを送ってほしいと手紙を書いた。彼らは浮浪者の集まるどや街から何人かのアルコールクスたちを集めてテントをはりそこでグループを始めた。

ビル・Wが最初に思い描いた仲間たちの成長のための国境を越えた経験のやりとりが、アメリカ・カナダ以外の海外でのAAの組織としての成熟を道具としてやっと実現したのだった。フィンランドは秘密裏に国境を越えてロシアで苦闘するアルコールクスたちにメッセージを送った。ミュンヘンのAAは独りぼっちのチェコ人に出会い、助けた。ドイツのAAはハンガリーにメッセージを送った。

オークランドで開かれた第15回のWSMでカメルーンでのAAの発足という飛躍的なレポートが即興で提出されたことを紹介しよう。ドナティエンという名のカメルーン人は1986年助けを求めてパリのGSOに手紙を書いた。10年にわたるパリGSOとのやり取りの間も飲み続けていた彼だったが、1996年にとうとうこう書いた。2ヶ月のソプラエティを達成したがこのままの状態では必ずスリップ(再び飲酒してしまうこと)してしまうだろう、と。このときフランス語圏のヨーロッパ地域を担当するWSMの代表者ジャン・イヴはドナティエンにソーパーを守り続けるには他の人とソプラエティを分かち合いその人たちとグループを作るべきであると返事をした。ドナティエンは刑務所の看守として働いていたことから刑務所内でグループを作ることにした。数ヵ月後、ジャン・イヴは刑務所の責任者からの電話で、ドナティエン自信何が起こったのか理解していないようだが確かに奇跡が起こったのだということを知らされた。ドナティエンはその時6ヶ月のソプラエティであり、同時に刑務所内の一番厄介者だった6名ほどの囚人をソーパーに導いたのだった。これがカメルーン最初のグループの始まりだった。

ドナティエンはジャン・イヴにカメルーンを訪ねグループの活動の支援をしてくれるよう依頼し、ジャン・イヴはフランス地域WSMの経済的支援を受けそれを実現させた。刑務所を所轄する当局はこの目の前で起こっている変化に心を動かされ、ジャン・イヴのために治安維持、医療、教育関係の専門化たちとの話し合いの場を設けた。そして第二のグループが大規模の学校で生まれることになった。彼は地元の聖職者とも接触し、その結果AAはアフリカで重要な宗教上のお祭りであるキリスト昇天祭の日3時間の儀式の一番最後の場

(4)

面でミーティングを開くよう依頼されたのだった。驚くほどの仲間たちが集まり、そこで3つ目のグループが誕生した。その週の終わりには合わせて6つのグループが誕生し、当初の半信半疑とはうらはらにグループは生き延び、そして成長していったのだった。今日カメルーンは16のグループに600人もメンバーをもつ。フランスWSMは現在8つの近隣国から支援要請を受けている。

ビル・Wはあるとき「AAはどうやって機能するのか」と訊かれ「これは上手い具合に機能するのだ」ととてもシンプルに答えた。この簡単な言葉は、しかし、二人の酒飲みが膝をつき合わせている状況から、二つそれ以上の数の国同士が助け合っている状況までのあらゆるレベルで力を発揮する、積み重ねられた経験の姿をそのまま言い表しているのである。

「About AA 1999年春号より」

友人からの便り

先日、あるお医者様からお手紙が届いた。精神科でアルコール依存症にくわしい、AAの良き友人としてご提案をいただいた。

女性の回復に関心を持たれ、まだ比較的少数で社会的な立場の脆弱な女性のアルコールに接して下さっている中でいくつかのお気づきとご提案を届けられたのでその一部だけであるが、ご紹介する。

「女性のアルコールとお付き合いが始まってから10年以上が経ちました。現在、女性独自のプログラムを作り患者さんと付き合っています。私の治療は(治療と呼べるのかわからないが)アルコールの問題で悩んでいる女性と付き合い、寄り添ってあげ、勇気付けをして、その中からその人が何か前向きな生き方を見つけ出すことへのお手伝いをしていただけであることに気づきました。私はたとえアルコールを飲んできても、怒ることはありませんし、男女間の問題を起してもそれを叱責することもありません。ただただじっと見守ってあげるので。しかし、私はお金をいただいている治療者ですから、なにがしかのメッセージを送らねばなりません。そこで本人に気づくようなサインを出します。ひとつはもの見方・考え方についていままでとは違ったやり方があることを、ひとつは女性性とは何か、自分らしさを出す方法を、ひとつは人間関係でのあり方や怒りの出し方を。もちろん相手が理解できるような言葉を見つけているつもりです。すると、この話の中のどこかで気づいてくれるのです。このときがチャンスで、一気にこちらに引き込んでゆくのが私の治療法なのです。

AAにお願いをしたら、どうぞ、自分の気持ちを安心して話せる場として、お互いを尊重し、楽しく伸び伸びと飲まない生き方を実践できる共同体であって欲しいということです。それぞれが人の批判や際限のない自己主張や干渉のないようにしたいものです。私の今までの経験から、特に女性のアルコールは自分を抑えた生き方を強いられてきた場合が多く、安心できる居場所が必要だと感じています。その

ようなミーティングの存在が断酒を長続きさせるコツではないでしょうか。」

何号か前の日本ニューズレターディアが女性と若者のアルコール問題に関心寄せていると書いたが、今女性のメンバーが増えているように感じている。潜在的なアルコールが表面化しただけだろうか。若い世代の女性の飲酒機会は考えられないほど増えたのではないだろうか。問題を持った人にAAのメッセージは届いているのだろうか。今年の夏にはメンバーシップサーヴェイの集計が行われるがどのような結果が得られるのか。AAが社会資源として少しでも活用されることを願ってやまない。

お知らせコーナー

第3回AA日本広報・病院・施設フォーラム in 広島

2004年11月6日(土) 10:00~16:30

エソール広島 (広島市中区富士見町11-6)

メインテーマ:「アルコール依存症からの回復」

サブテーマ:「社会資源としてのAA」

滋賀、栃木と開催してまいりました広報・病院・施設フォーラムを今年は広島で開催することになりました。

AAがアルコールの問題で苦しんでいる人たちにとって、解決の一助になりますことを願い、関係者の皆さまとの連携を深め、社会の中でご活用いただけるようにしたいと考えております。

どなたでもご参加いただけます。

お申し込みや詳細についてはJSOまでご連絡ください。

「2004メンバーシップサーヴェイ」 のお知らせ

'97、'01と過去2回アンケート集計を行ってまいりました。関係者、専門機関などにAAの実態を知っていただく資料として活用されております。今年の6月をアンケート記入期間として、秋には集計結果の速報をお知らせできると考えています。

日本ニューズレター108号に掲載する予定で、リーフレットは来年度に作成いたします。

「メッセージ先の病院での医療関係者への アンケート集計」

現在集計の編集中ですが、グラフや「AAに望むこと」などをまとめて日本ニューズレター106号に掲載いたしました。お手元に届いていないようでしたらお知らせください。

JSOの業務時間 月~金、最終連続土・日(それ以外の土・日・祝 休み) 10時~18時

関係する機関などで、この「専門家の皆様へのニューズレター」が届いていない場合は、どうぞ送付先をご連絡下さい。

URL <http://www.cam.hi-ho.ne.jp/aa-jso/>

e-mail aa-jso@cam.hi-ho.ne.jp